

# 歴史探訪

## クラブ! 其の170

History Inquiry Club



文化生涯学習課 ☎ 22局 1720  
(博物館) FAX 22局 2028

### 変わった形の道具

田原中部小学校の隣、田原城桜門正面にある田原市民俗資料館。江戸時代以降の民具が展示されています。そこへ訪れ、展示品を見ていた際に、少し変わった形の道具が目にとまりました。高さ1.5mほどで、いかりに似た形をしており、先端には金属の刃先が付けられています。このような形の道具を当時の人は何のため、どのようにして使用したのでしょうか。



●犁(牛耕用)  
田原市民俗資料館蔵

これは、田畑を耕すために使用された犁からきという農具です。人が使用するのではなく、家畜である牛馬に引かせ、歩いて進む力を利用して田畑を耕しました。田原市民俗資料館に展示してある犁は、明治中ごろから昭和の中ごろまで実際に使用されていたものです。

土を耕したり、掘ったりする道具は、縄文時代には使用されてきました。初めのころは木や石で作った道具でした。そして、弥生時代中期から、鉄の農具が使用されるようになっていきます。材料が木や石から鉄になったため、硬い土でも耕しやすくなりました。その後、飛鳥時代には大陸から日本に犁が伝来し、人力だけで農作業を行うのではなく、家畜を利用した牛耕を行うようになっていきます。

よって進んでいきます。戦後、広大な面積の農地を耕す際に、耕運機、トラクターなどの農業機械の使用が普及し、家畜を利用しなくなりました。

芦ヶ池北側の古墳時代を中心とした山崎遺跡では、田原市で1番古い古墳時代後期(6〜7世紀)の農具が見つかっています。土を掘ったり、耕したりする鋤くわ、鋤すきの先が分かれ土をならす杓えがり、運搬のために使用されたと思われる天秤棒などが発掘調査により発見されました。これらの農具の一部は、形が少し変化していますが、今でも使用されているものもあります。

田原市民俗資料館で、犁などの昔の道具を見ると、当時の人々がどのように道具を改良し、工夫して使用していたかが分かります。

●牛耕の様子(昭和前半ごろ)／渥美郷土資料館蔵



### 今月の「表紙」

▼広報たはらは4月からリニューアルし、同時に月1回発行となるため、15日号の発行は今号が最後となります。広報担当としては、大きな節目。卒業証書を手に目を輝かせる福江高校卒業生の皆さんや、免々田川沿いの咲き誇る花々を見て、皆さんに親しまれる紙面づくりへの決意を新たにしました。(H)

【表紙の写真】免々田川の風景と福江高校今年度卒業生(福江町)

(清水)